

全ロシア国家千年記念碑（ノヴゴロド）

——大改革時代の国民的記念碑考

池 本 今日子

「正教、専制、国民性」が教育原理として掲げられたニコライ一世の時代には、一七世紀初頭の動乱期の英雄



図 1：全ロシア国家千年記念碑
(2019 年 8 月筆者撮影)

として、貴族ドミトリー・ポジャルスキーと、商人クジマ・ミーニンのうち、前者が重視されていた。¹⁾二人の姿は、次帝アレクサンドル二世治世下の「一八六二年にノヴゴロドに設置された「全ロシア（ロシースキー）」国家千年記念碑」(図1)にも刻まれた。農奴解放やゼムストヴォの設置など大改革が行われたこの時代には、一六一三年にミハイル・ロマノフを選出した全国会議にも注目が集まった。

この記念碑はリチャード・ウォートマンにより取り上げられた。彼によれば、アレクサンドル二世と政府はロシアの発展だけではなく国民をも表象し、それによって君主と人民の結合を示唆しようとした。しかし、彼が国

家を重視した結果、国民概念の曖昧さが記念碑に反映されることになったという。⁵⁾ 本稿では、この記念碑のコンセプトに関する皇帝周辺の意図を考察する。また、表象に曖昧さがあるとすれば、それを招いた経緯を考察することにより、改めてその背景や原因を探る。さらに、筆者が以前から取り上げているボジャルスキーやミーニンなどの表象に関連するこの時代の著作を検討し、記念碑の表現と比較する。⁶⁾

一・全ロシア国家千年記念碑の建立

一八五五年にアレクサンドル二世が即位した後、前治世による言論や大学への圧迫の記憶はいまだ鮮明であったものの、社会は解放的な気分を満たされ、比較的自由な言論が現れた。五〇年代後半には、農村共同体の起源や西欧の政治体制などが歴史学や法学の分野で論じられた。一八五八年には農奴解放に関する様々な意見が雑誌に現れ、全ての県で県委員会の設置が始まり、首都と地方の双方で議論が沸騰した。新聞や雑誌はあらゆる問題について自由に発言するようになっていた。過激な意見

の表明も出現した。その最左翼に立つのが、ニコライ・ドブロリューボフ、ニコライ・チェルヌイシエフスキー、ニコライ・ネクラースォフが編集を務める雑誌『同時代人』であった。⁷⁾

一八六一年二月一九日に農奴解放令が発せられると、農民に動揺が広がり、地域により流血の事態となった。前年に学生団体が形成されていたペテルブルク大学では、一八六一年九月から一〇月に学生の騒擾が起り、軍・警察との衝突を引き起こした。三〇〇人を超える学生がペトロパヴロフスクとクロンシュタットの要塞に政治犯として投獄された。同大学が閉鎖された後、ニコライ・コストマロフを含む一部の教員が市議会で公開講義を始めた。この活動は「ペテルブルク自由大学」と呼ばれた。この年、ドミトリー・ピーサレフが雑誌『ロシアの言葉』でニヒリズムの立場から急進的な議論を展開し始めた。また、革命的なピラが出現し、政府は不安を募らせた。秋には、チェルヌイシエフスキーやドブロリューボフ、アレクサンドル・ゲルツェンらを思想的指導者として、農民革命を目指す結社、第一次「土地と自由」

が結成された。⁽⁷⁾

翌年一月にはモスクワ貴族集会における議論を発端として、農奴解放令に不満を持つ貴族とインテリゲンツィアから代表制の要求が起こった。五月にはペテルブルクの火災が社会的不安を煽り、政府はチエルヌイシエフスキーやピーサレフを逮捕し、『同時代人』と『ロシアの言葉』を停刊処分とした。進歩的社会の大半は革命的展開に驚き、やがて一八六三年に入ると、一月のポーランド蜂起を契機に沸き起こった愛国的感情の中で、ラデイカルは孤立していくことになる。⁽⁸⁾

ノヴゴロドは、代表制を求める貴族の運動の中心の一つであった。⁽⁹⁾このような騒々しい世情の中で、一八六二年九月八日に同地で全ロシア国家千年記念碑の除幕式が行われた。この記念碑で、ポジヤルスキーはミハイル・ロマノフと共にロマノフ朝成立を表現することになる。

記念碑の設置は一八五七年に決定されていた。同年三月二十七日に、内務大臣セルゲイ・ランスコイがリュウリクの記念碑を一八六二年にノヴゴロドに設置することを提案した。これを受けて大臣委員会は、リュウリクによ

るノヴゴロド建設だけではなく、ロシアの千年間全体を記念するモニメントを建立すべきであると結論し、アレクサンドル二世の同意を得た。五月二十九日に内務省は各県知事に全階層からの寄付を募るように命じた。⁽¹⁰⁾

その後、一八五九年四月により具体的な設置場所が決定し、道路公共建築総局がデザインのコンペティションを告示した。記念碑の公開は一八六二年八月二十六日と予定された。一八五九年一月に美術アカデミーの特別委員会は、五〇以上の案の中からミハイル・ミケシンのものを選んだ。彼はスモレンスク県出身で、二四歳の無名の画家であった。⁽¹¹⁾

これは期限のある事業であり、アレクサンドル二世が直接関与した。道路公共建築総局の見積もりでは五〇万ルーブル以上かかるところ、寄付金が一八五九年までに約七万ルーブルしか集まらなかったため、一八六〇年と六一年に合計四〇万ルーブルが国庫から拠出された。⁽¹²⁾

二．全ロシア国家千年記念碑のコンセプト

この記念碑のコンセプトについて、道路公共建築総局

長官の許可を得て皇帝官房第二部印刷所で発行された冊子『全ロシア国家千年記念碑』(一八六二年)⁽¹³⁾を中心に検討する。

この公式冊子に記載されたところによれば、大臣委員会は一八五七年に、リユーリク、ウラジーミル一世、ドミトリー・ドンスコイ、イヴァン三世、ロマノフ朝の皇帝たちの重要性を指摘して、こう述べた。「我々の祖国史の主たる出来事」を表現する「全ロシア国家千年の国民的記念碑」を建立することは、「皇帝陛下の意図の偉大さと、ロシア国民が皇帝陛下と常に共有した、そしていま共有している感情に叶うはずである」。同じく冊子に記された同年の寄付金募集の告示によれば、この記念碑は、ロシア国家千年の歴史を不朽のものとするための「国民的記念碑」である。また、「祖国の息子たち」が「その栄えある過去に視線を向け」、「ロシアが厳しい体験を経て、神の助けを得て」「現在のその特別な大きさと偉大さまで到達した」ということを理解するための記念碑である。⁽¹⁴⁾

記念碑はこうして、何よりも国家発展の記念碑であ

り、国民的記念碑でもあった。ただし、この国民的記念碑という言葉に、国民を記念するという意味は薄い。それは、皇帝と国民が共有する感情にしたがい、君主によるロシア国家発展の歴史を記念し、かつまた、その歴史を国民に示す記念碑であった。皇帝と国民の精神的紐帯を強化するという期待が窺える。⁽¹⁵⁾このような「国民」は、西欧的な政治的存在ではなく、皇帝と精神的に結びついた従順な存在である。これが記念碑の当初のコンセプトであり、国民概念であった。

一八五九年に新聞に掲載されたコンペの告示は、「全ロシア国家千年の国民的記念碑」のデザインの主眼を、「ロシア国家の千年に及ぶ漸進的發展の記念」に置いた。それはロシア史の六つの重要な時代を六人の人物で次のように表現することを指示した。

リユーリク——ロシア国家の成立、八六二年。ウラジーミル「一世」——キリスト教のロシアへの導入、キリスト生誕九八八年。ドミトリー・ドンスコイ——タタールの軛からの最初の解放(ママ)、一三

八〇年。イヴァン三世——君主制による統一
(основание единодержавия Царства Русского)。
一四九一年。⁽³²⁾ミハイル・フョードロヴィチ「ロマノ
フ」——ロマノフ家の王座への選出による君主制の
復活、一六一三年。ピョートル大帝——ロシアの改
革とロシア帝国の成立、一七二一年。

さらに、「これらの上に圧倒的な形態で、ロシア国民の
道徳的偉大さの主たる土台としての正教信仰の表象」が
置かれる。⁽¹⁰⁾ここで、ロシア国家千年の歴史は、神の助け
をかりた君主による統一と発展の歴史として捉えられ
た。

ノヴゴロドのクレムリンのソフィア聖堂前広場が設置
場所選ばれたのは、コンベ告知の直前である。公式の
冊子によれば、ノヴゴロド市内に三つの候補地があつ
た。第一に、最終的に決定したソフィア聖堂前広場。⁽³¹⁾第
二に、クレムリン前のソフィア広場。⁽³²⁾第三に、ヴォルホ
フ川を挟んでクレムリンの対岸に位置する「商業地区の
交易所前の広場、ヤロスラフの塔の近く」⁽³³⁾である。「ヤ

ロスラフの塔」は民会の鐘を擁した塔のことであり、そ
の塔の近くの広場とは民会広場を意味する。⁽³³⁾

ノヴゴロドはキエフ・ルーシ時代にはキエフに次ぐ都
市であつた。タタールの軛を免れ、ハンザ同盟都市とし
て、また、公を戴きながらも民会が支配する共和政都市
国家として、一五世紀にイヴァン三世によりモスクワ大
公国に併合されるまで栄えた。一九世紀初頭、ニコラ
イ・カラムジンが『女市長マルファ』で、ノヴゴロドの
指導者マルファに次のように語らせた。「間もなく、
我々の自由の最期の時が鳴る。そして民会の鐘、その古
来の自由の声はヤロスラフの塔から落ち、永遠に鳴らな
いであろう」。⁽³⁴⁾民会の鐘はノヴゴロドの自由と都市共和
政の象徴であつた。鐘は、一四七八年にイヴァン三世が
モスクワへ持ち帰つた。⁽³⁵⁾民会の鐘と民会広場は共和政の
記憶と強く結びついている。

公式の冊子によれば、ソフィア聖堂前広場が選ばれた
のは、この聖堂が「九世紀(ママ)」⁽³⁶⁾からいままで壮麗な
堅牢さでここにそびえている」からであり、次に、そこ
で、「民会の存在と君主制 единодержавие 原理の最後

の闘いが行われ、我々の広大な祖国のあるべき国家生活の土台」が築かれたからであるという。⁽²²⁾ すなわち、君主制の原理が民会の原理に勝利したからである。君主制の重視が場所を左右したといえる。

モニュメントそのものを見てみよう。君主制原理の勝利という見方は、記念碑の形に関する解釈に通じる。記念碑の全体的な形は鐘であり、民会の鐘を連想させる。⁽²³⁾ しかし、公式に鐘への言及はない。公式冊子によれば、記念碑は三つの部分から成る。最上部に「正教の群像」、中段に六つの彫刻群に取り囲まれた宝珠、下段に、一周する形で群像が帯状に刻まれた台座である。⁽²⁴⁾ つまり、公式には、記念碑は自由の鐘ではなく、正教のイメージと、君主権力の象徴である宝珠、そしてその台座である。

コンペの条件であった最上部の正教のイメージは、女性像と十字架、十字架を支える天使とから成り、その十字架は宝珠のそれである。公式冊子によれば、女性像は「我々の民族的な衣装をまとい、双頭の鷲が描かれた楯を持つツァーリの妃」であり、ロシア観念を具象化した

ものである。天使は右手で、「正教の庇護のもとにある輝かしい未来を彼女に指し示す」。すでに述べたように、コンペの告示において、正教は「ロシア国民の道德的美点の主たる土台」と記された。⁽²⁵⁾ しかし、ロシアそのものであるというツァーリの妃に、正教のもとにあるロシアの発展を示すという言葉は、国民の宗教を表現するというよりも、国民に忠実な正教徒であることを求めているように見える。

その下の中段に、宝珠を囲んで、やはりコンペの告示に従って、ロシア史の六つの重要な時代が、ロシアの統治者を中心とするそれぞれの群像によつて表現された。ここでイヴァン三世とミハイル・ロマノフが宝珠を持ち、ウラジーミル一世が十字架を掲げた。宝珠と十字架のイメージが繰り返されたのである。また、リユーリクとウラジーミルはキエフのある南を、ドミトリー・ドンスコイは南東、タタールとの国境を向き、イヴァン三世は東のモスクワを、ミハイルは西のポーランドを、ピョートル大帝はベテルブルクのある北を向いた。⁽²⁶⁾ こうして、中段の彫刻群は神の助けをかりたロシアの君主によ

る領土の拡大と国の統合を表現する。

ミハイル・ロマノフの群像(図2)を見てみよう。コンペの指定では「ロマノフ家の玉座への選出による君主制の復活」の図であった。公式冊子における個別の説明においては、「ポジヤルスキーの剣の保護のもとに、ツァーリの功績に天が力を与えたもうことを祈って十字を



図2：全ロシア国家千年記念碑中段、ミハイル・ロマノフの群像(2019年8月筆者撮影)

切りながら、国民から選出された跪く者からモノマフの冠を受けとらんとする、手に宝珠を持つ若きミハイル・ロマノフ⁽³²⁾の姿である。

この群像は、伝統的な英雄としてのポジヤルスキー像を想起させる。それは、彼が動乱を収め、国民に即位を求められたがそれを固辞し、「ツァーリの家門の遺された子孫である」ミハイル・ロマノフを帝位に即けたという物語から始まっていた。一八世紀末にガヴリーラ・デルジャーヴィンが創作したストーリーである⁽³³⁾。ポジヤルスキーとミーニンが英雄と見做されてきたことを考慮すると、ミハイルのために宝珠を捧げ持つこの民衆はミーニンと考えられる。英雄ポジヤルスキーとミーニンの活躍により正統な君主が即位したという伝統的イメージが成立している。ポジヤルスキーとミーニンの像の位置や大きさから、身分秩序に従い、ミーニンよりもポジヤルスキーを重視する傾向も受け継いだことがわかる。

その一方、デルジャーヴィンの物語ではポジヤルスキーがミハイルに帝冠を与えるのに対して、ここではミハイルはミーニンから受け取る。また、ミーニンは国民か

ら選出された、すなわち、国民の代表であると記される。このことは、全国会議のイメージ、あるいは、国民ないし民衆の重視に結びつく。ただ、前述したように、この中段の六つの群像が全体として君主による国の発展を描いている中でのことであり、伝統的なイメージが優る。

こうして、国家千年の記念碑は上段と中段の造形により、君主権力による、神の助けをかりた国家の発展を表現した。スラヴ派のフォードル・ブスラエフは、この中段の群像を「記念碑の最も目立つ、主要な部分」であると述べた。⁽³¹⁾ たしかに、この中段の印象は圧倒的である。

下段には、台座を取り巻いて「啓蒙家」、「為政者」、「軍人と英雄」、「文学者と画家」という四つの集団に分かれて、総勢一〇九名の群像が彫られた。⁽³²⁾ 公式冊子によれば、この群像は、「ロシアの地の最も拔き出た人々」の浮彫として計画されたものであり、「国家存在の千年における才能、知性、まれな道德的資質の發揮を人物でたどる最も教訓的な歴史」である。⁽³³⁾

宝珠と十字架という君主権力のレガリアがこの下段で

も繰り返された。ミハイル・ロモノフとイヴァン三世が宝珠を、ウラジーミル一世と聖人ロストフのアヴラーミイが十字架を持つ。⁽³⁴⁾ 一〇九名の内訳は、啓蒙家三一人、為政者二六人、軍人と英雄三六人、文学者と画家一六人である。「啓蒙家」として挙げられたのは、聖職者などロシア正教に関わる人物である。全体的に、国家と正教会の関係者が圧倒的に多い。その一方、文学者と画家の範疇が存在したことはたしかである。

このカテゴリーでは、学者で文学者のロモノソフ、保守派のカラムジン、デルジャーヴィン、ジュコフスキーのほかに、体制に批判的で、ニコライ一世期に当局に危険視されていたプーシキン（一七九九―一八三七）とレールモントフ（一八一四―一八四一）、グリボエドフ（一七九五―一八二九）、自作の反響の大きさに自ら国外へ逃げ出したゴーゴリ（一八〇九―一八五二）⁽³⁵⁾の姿が刻まれた。さらに、軍人と英雄として、イヴァン三世期の軍人とイェルマークの間に、ノヴゴロドの自由と抵抗のシンボルである前述の女市長マルファの像が、うつむいた姿で刻まれた。⁽³⁶⁾

公式冊子は、「大ロシアの活動家だけではなく、彼らと並んで、様々な国民性 национальности の代表者も」刻まれたと記し、全ロシア的、全帝國的イメージを与えようとした。例として言及されたのは、「リトアニアの出身者」としてリトアニア大公ゲジミン（ゲディミナス）とオリゲルト（アルギルダス）、ヴェイトフト（ヴィータウタス）である。いずれも為政者の範疇であつた。冊子は言及しなかつたが、軍人・英雄としてオリゲルトの共同統治者ケイストウト（ケーストウティス）のほか、リトアニア出身のブスコフ公ダヴモン（ダウマンタス）、ウクライナ・カザークのボフダン・フメルニツキー、ドイツ系の陸相ミハイル・バルクラインドロトリ、ドイツ出身の元帥フリストフォル・ミニフ（ブルクハルト・フォン・ミュンニヒ）の姿もある。また、作家ゴリはウクライナの人である。このほかにも若干の非ロシア人が取り上げられた。

動乱期の人物としては、為政者の一群の中で玉座にすわるミハイル・ロマノフの両側に、彼の父フィラレートと、ポーランド軍に捉えられて獄死した総主教ゲルモゲ

ンが彫られた。ゲルモゲンは、冊子によれば、「あたかも棺から「命じるが」如くに、玉座へのミハイルの選出を命じる」⁽¹⁾。玉座への選出という語はあるものの、聖職者がそれを指示するという一節は、全国会議による選出という要素を薄め、帝権の正統性における正教会の支持の重要性を印象づける。また、軍人と英雄として、スコピオン・シユイスキーのとなりに、「ポジャルスキーがミーニンとともに宝珠の保護者として」⁽²⁾彫られ、三位一体セルギイ修道院執事長で政治家でもあるアヴラーミー・パーリツインとともに、帝冠を見詰める。やはりミーニンは跪く。さらに、その帝冠の近くに、唯一の農民スサーニンが座る姿が刻まれた。

こうして記念碑は、ロシア国家の発展の記念碑であり、国民的記念碑でもあつた。それは民会を象徴する鐘に見えるものの、公式には権力の象徴である宝珠であり、民会原理に対する君主制原理の勝利を表現する。とりわけ、下段を圧倒する中段の人物像は、君主権力のもとでの神の助けをかりた国家の発展を表現した。それは国民にロシア国家の歴史を理解させ、皇帝と国民の精神

的一体感を増させるための記念碑であった。しかし、その一方、公式冊子は、ロシア帝国の構成地域のかつての支配者を例に下段に非ロシア人を含むことを強調し、文学者と画家の範疇を作り、全帝國的、全階層的なイメージを与えようとした。記念碑は非ロシア人のほか、文学者や体制に批判的、反抗的であった者、民衆をとり上げ、「国民」を表現することに一定の配慮をしたようにみえる。しかしながら、その人選は、ロシア人と為政者や軍人、正教会聖職者に偏っていた。また、下段では皇帝と聖職者、臣下、民衆が一体となって描かれたが、民衆の表現は控えめである。

この下段の人物の選定には様々な人々が関わった。その制作や人物選択の過程から、皇帝と当局の姿勢や社会の反応の一端が窺われる。

三・「全ロシア国家千年記念碑」下段人物の選定過程

前述したコンペの告示は、下段の存在も、また、そのデザインも指定していなかった。ただ、記念碑を「全ロシア国家の千年に及ぶ漸進的發展の記念」とすることを

求めたにすぎない。コンペに採用された時点でのミケシンの案は、メダリオンに分かれた六つの浮彫であったが、具体的内容は決まっていなかった。この下段は当初、美術アカデミー教授ピョートル・クロット（ペーター・クロット・フォン・ユルゲンズブルク）にデザインと制作が依頼されていたが、彼は中段のテーマを下段で繰り返し返した。これに対して、一八六〇年六月に、様々な分野でロシアの強大化に貢献した重要人物の浮彫を下段に制作することをミケシンが提案し、アレクサンドル二世に認められ、改めて彼に託された。⁽¹³⁾

下段の人選は最終的にはアレクサンドル二世が決定したが、ミケシンがその案を作成した。リストの完成に至る過程で、社会の議論を呼び起こした。

ミケシンは様々な人物に助言を求めた。国家学派の歴史家で後にモスクワ大学学長となるセルгей・ソロヴィヨフの一方で、スラヴ派のミハイル・ポゴジンと前出のブスラエフの名も挙がる。歴史家でスラヴ主義者のニコライ・コストマロフにも相談した。彼はロシア貴族とウクライナ人女性の子で、ウクライナとスラヴ諸民族の相

互協力と発展を目指したキリルⅡメフォディ結社の中心人物であった。独立したスラヴ諸民族を、自由主義をとっていた一つの君主政のもとで連邦に統合すべきであると考えていた。一八四七年に逮捕され、ペトロパヴロフスク要塞に拘禁された後に追放されたが、一八五九年にアレクサンドル二世に赦され、ペテルブルク大学に教授として着任した。⁽¹¹⁾さらに、ミケシンは作家にも相談した。ゴンチャロフとイヴァン・トウルゲーンフである。⁽¹²⁾後者は『獵人日記』で農奴制を批判し、一八五三年まで所領の村に蟄居させられていた。

ミケシンは、一八六〇年八月二二日に道路公共建築総局長官コンスタンティン・チェフキンに最初の案を提出した。リストは社会の関心と呼んだ。その結果、修正が行われ、九月一日にアレクサンドル二世の承認を得たミケシンの第二次案には、リトアニア大公オリゲルトとヴィトルト、動乱時代ではフィラレートとパーリツィン、作家レールモントフとグリボエードフなどが採用された。その後、エカテリーナ二世とアレクサンドル一世が加えられた一方、イオニア七島連邦共和国の成立に尽く

した海軍提督フョードル・ウシャコフが除かれた。ゴリは一旦加えられたが、削除された。一二月八日にミケシンが再度の提案をした際に、皇帝が自らデルジャーヴィンとヴィクトル・コチュベイを加えた。⁽¹³⁾その後、翌一八六一年二月二六日にウクライナの詩人タラス・シェフチェンコが亡くなったが、その頃、ミケシンがシェフチェンコとゴリをリストに加えたと思られる。⁽¹⁴⁾シェフチェンコはコストマロフと同様、キリルⅡメフォディ結社に関わり追放され、アレクサンドル二世即位後に赦されて首都へ戻っていた。彼は、政治的に独立したスラヴ諸民族の各共和国からなる民主的連邦を熱烈に支持していた。⁽¹⁵⁾

一八六一年末に科学アカデミーが発行した翌年の暦の別冊に「全ロシア千年記念碑の解説」が掲載されたが、そこに記念碑の人物リストが含まれている。アカデミーが道路公共建築総局から入手して掲載したというこのリストには、シェフチェンコとゴリの名がある。アカデミーは同じ暦別冊の訃報欄に、シェフチェンコに対する追悼文も掲載した。「ロシアは……天才的詩人、熱烈

な愛国者……を失った」。彼が「全ロシア千年の記念碑の浮彫に場所を与えられた」ことは正当である。この言葉や、そもそもリストに二人の名があったことがチェフキンを怒らせた。ミケシンがアレクサンドル二世に訴えた結果、ゴーゴリのみが認められた。⁽¹⁹⁾ シェフチェンコはウクライナ語で詩作した、ウクライナ文学の詩人であり、共和政を理想としていた。それに対し、ゴーゴリはロシア文学の作家である。⁽²⁰⁾

ブスラエフは、圧倒的な印象を持つ中段の群像の性格が記念碑全体の性格を決定したと述べた。その結果、記念碑は「ロシアの国家生活、ロシアの政治の記念」となってしまう、「ロシア人の自身の歴史と国民性に対する現代の意識」を表現していない、と批判した。彼は同時に下段の群像についてこう述べる。下段の群像は「国民の様々な階層の人物」を表現したものの、像の大きさと位置から判断して、上段の六つの集団が与える強い印象を打ち消し得ない。下段の彫刻群は、国民全体に配慮し、「我々の偉大な祖国」の諸地域、諸都市を代表する人物を取り上げることによって、上段の「政治的テーマ

の一面性を補う」べきであった、と。彼は、中段の圧倒的存在感と、下段の人物選定の偏りのため、記念碑は全体的に、政治的国家的人物の比重が大きく、国民の記念碑となっていない、と批判したのである。⁽²¹⁾ 国民的記念碑は国民を表現すべきものであると考えられていた。もっとも、スラヴ派の彼が言う国民とはロシア人のことである。彼は最上部の正教のイメージでツァーリの妃が着用している衣装について、伝統的なものではなく、ロシアの歴史と国民性を表現できない、と批判した。⁽²²⁾

下段に誰を選ぶかについての様々な意見の噴出は、このモニュメントが国民の表象となるべきであると考えられていた証拠である。このような議論が、そのような見方を一層深めたことは想像に難くない。誰が国民の代表にふさわしいかを考えることは、国民像を考えることにつながるが、社会に一致した国民概念はなかった。一方、アレクサンドル二世は特に下段に関して確固たるプランも明確なイメージも持たないまま、記念碑で国家だけでなく、国民も表象する方向へ動いた。彼はかなりの部分をミケシンに任せ、成り行きに任せた。その結

果、政治家や聖職者、ロシア人以外もとり上げられたが、真にロシア帝国全体の様々な地域や階層の代表がリストに集まることはなかった。

四、「ミーニンとポジャルスキー」と一八六三年の

全国会議

すでに述べたように、一八六二年に貴族とインテリゲンツィアの間で代表制の要求が起こったが、アレクサンドル二世は認めなかった。一八六三年に内相ヴァルーエフが提案した、ゼムストヴォ代表を国家評議会に参加させる考えや、国家評議会を上院として下院を創設する案も退けられた。⁽³⁾一八六四年一月、ゼムストヴォのみが設置される。この時代には、動乱と一八一三年の全国会議への再評価も行われた。

ノヴゴロドの記念碑中段のミハイル・ロマノフの群像は、前述のように、英雄ポジャルスキーとミーニンが正統な君主の即位を支持した図であり、全体として、ポジャルスキーとミーニンの伝統的イメージを強く想起させる。国民の代表としてミーニンが帝冠を捧げ持つ点は、

全国会議や国民、民衆への配慮を窺わせる。一方、動乱と全国会議に関わる下段の群像は正教会のミハイルへの支持を重視した。ここでは、ポジャルスキーとミーニンとロマノフ成立が当時どのように捉えられていたかについて、その一端を検討する。

国家学派のソロヴィヨフ⁽³⁴⁾は、『古代からのロシア史』の中で、動乱の終結へ向かった一連の出来事についてポジャルスキーやミーニンはもちろんのこと、パーリツィンやトルベツコイ、カザークなどそれぞれの活動を描写した。一方、スラヴ派のイヴァン・ペリヤーエフは非仕官者を評価し、一八六二年の著作で、動乱期の描写にポジャルスキーもミーニンも登場させなかった。⁽³⁵⁾この二つの著作は、ポジャルスキーとミーニンを特別視しない。

コストマロフもまた二人を英雄視しなかった。⁽³⁶⁾さらに、英雄の座から引きずり下ろそうとした。一八七一年に『ヨーロッパ報知』に掲載された「動乱時代の人物」で、彼はポジャルスキーを「有能ではない」と厳しく評価した。反対に、彼のモスクワ行きを急ぎ立てた三位一体セルギイ修道院と、モスクワ解放にあたり敵の物資を

奪ったカザークとを評価する。同時代人が功労者と見做していたのはポジャルスキーではなく、ドミトリー・トルベツコイであつた、と指摘した。ポジャルスキーは「多くの尊敬すべき人の一人」ではあつたが、「我々の時代に考えられているような主たる英雄、ロシアの解放者にして救い主とは当時考えられていなかった」と論じた。ミーニンについては、「強い意志ときつい性格を持ち、実際の、政治家の一つのタイプ」であると見做した。ニジニルノヴゴロドの長老としての支配を「強力な独裁政治」と呼んだ。その一方、彼が貧しい者からも財産を奪つたことに關して、それを安く購入した富裕層に、義勇軍のために隠し財産を提供する氣にさせるためであり、厳しい手段が必要とされた時代であつた、と指摘した。英雄を英雄として描かない姿勢と、公平であらうとする姿勢が窺える。⁵⁷⁾

コストマロフの論に対して、翌年、スラヴ派のイヴァン・ザベリーンが『ミーニンとポジャルスキー』において次のように反論した。二人は「全国民的運動における純粹で聖なる象徴である」。ポジャルスキーは「通常想

像されているように重要な、たとえ第一のではなくても、ミーニンに次いで第二の、ロシアを動乱から、ポーランド人と盜賊から解放し救つた英雄である」と。⁵⁸⁾ポジャルスキーとミーニンの英雄としてのイメージは強力であつたことが窺われる。ザベリーンは、ミーニンよりもポジャルスキーにページを割く一方、タイトルは「ポジャルスキーとミーニン」ではなく、「ミーニンとポジャルスキー」とした。

自由主義者のプラトン・パヴロフは、ミーニンについて「ロシアを救つた」と称える一方、ポジャルスキーについては「ポーランド人との闘いで勇氣と負傷により榮ある」公と評価するにすぎない。⁵⁹⁾彼はポジャルスキーよりも、民衆であるミーニンをより高く評価した。

二人を特別視する傾向と、ミーニンを先に記す傾向は、セルゲイ・イズヴォリスキー著『市民ミーニンとポジャルスキー公——一六二二年のモスクワと祖国の解放』からも窺われる。彼は様々な登場人物の活躍を描いたが、「ミーニンとポジャルスキーがロシアを救つた」のであり、「市民ミーニンとポジャルスキー公にロシア

は永遠に感謝する」という言葉で著書を締めくくった。⁽⁶¹⁾これは、赤の広場の二人の記念碑に刻まれた献辞に由来するものであると考えられる。

こうして英雄視ないし特別視する著作が存在した。また、「ミーニンとポジャルスキー」という表現が一般化しているようにみえるものの、実際にポジャルスキーよりもミーニンを重視しているとは限らない。記念碑のポジャルスキー像は、一般的な感覚からはさほど乖離したものでなかったといえる。英雄視の見直しの動きは反映されなかった。

さて、全国会議におけるミハイルの選出について見てみよう。

ソロヴィヨフは次のように描写した。士族とドン・カザークが一致してミハイル・ロマノフを支持し、さらに、その場にいなかった名門貴族や選出された者たちが呼び集められた。「国民は喜んでミハイルをツァーリと認めるだろう」という報告がもたらされ、全国会議は全会一致でミハイルに決定した。ロブノエ・ミエスト（布告台）を取り巻く国民は誰を望むかを尋ねられて、「ミ

ハイル・ロマノフ」と答えた。⁽⁶²⁾中立的な描写ではあるが、全国会議を重視する。

前述のパヴロフは、ペテルブルク大学に教授としての着任が決まっていた。彼は一八六一年末に「ロシア千年」についての論考を著した。前述したアカデミーの一八六二年の暦別冊に掲載されたものである。これは、「当時としては著しく自由な調子で」書かれた。⁽⁶³⁾

パヴロフによれば、動乱時代に、「国民はすでに君主制の精神に強く貫かれ、ツァーリの空位の後、自らの希望に従い、自らが自らに君主を与え作った」。ロシア住民の中の「愛国的党派」の「お陰で、我々の祖国に秩序が到来し、国民の全国会議において、全ての自由な身分の、選出された全ての国民によって全員一致して選ばれた、ロマノフ朝の創始者の治世が到来し得た」。⁽⁶⁴⁾

とりわけ目を引くのは次の一段である。

他民族からのロシア解放の経緯とミハイル・フョドロヴィチの選出は深い意味を持つ。誰がロシアを解放したのか？ ニジニノヴゴロドの肉屋（ミー

ニンのこと）に代表されるロシア国民である。誰がモスクワの玉座にツァーリを選んだのか？ これも、全国会議の被選出者であるロシア国民である。最後に誰が、全土に選ばれたツァーリの命を助けたのか？ 再び、百姓であるロシア国民（イヴァン・スサーニンのこと）である。こうして、ロマノフ家は、その即位、自らの創始者の命、一言で言えば、全てをロシア国民に負っている。⁶⁵⁾

彼はさらに一八六二年三月二日に、ペテルブルク自由大学でロシア千年について講演した。コストマロフは回想録に慎重にこう記した。「自由主義的な意図を持ちうるところや、他の意味に解釈させる口実を与えうるところでは特に、教授は拍手で幾度となく停止され、中断された」⁶⁶⁾。一般的に、パヴロフの次の締めくくりの言葉は衝撃的であった。「ロシアはいま深淵の縁に立っている。もし、最後の救いの手段として国民との接近に取り組まなければ、その深淵に我々は落ちるであろう」。三日後、彼はヴェトルガ（コストロマ県）に追放された。自由大

学の運営委員会は閉鎖を決定した。前述のパヴロフの論考は一八六三年に単行本として出版されたが、「……ロマノフ家は……全てを国民に負っている」という、先に引用した一段は、検閲により削除された。⁶⁷⁾彼の国民観は、君主制を否定しないものの、西欧的にして、かつ民主的なものであった。⁶⁸⁾

スラヴ派のペリヤーエフは、ロシア人の非仕官者や都市や村の共同体に重きを置く。動乱により、仕官者と非仕官者の対立という従来の構図が崩壊し、「長い間沈黙していた都市と村の共同体が声を上げ」、仕官者と非仕官者が団結し秩序が回復した。「全国民の意思で最高権力も探し出され」、全国会議で、選出された仕官者だけではなく、都市からの被選出者も参加して、ミハイル・ロマノフがツァーリに選出された。「従来の集権化で脇へ追いやられていた非仕官者」が再び「間接的に国家統治に参加し、共同体の声が再び国家統治において、ツァーリ選出だけではなく、選出の維持においても、しかるべき位置を占めた」⁶⁹⁾。

コストマロフは前述の自由大学の閉鎖に従わなかった

が、次の三月八日の講義は騒然となり、中止せざるをえなかった。以後の講義は当局に禁止され、これがペテルブルク大学教員としての最後の授業となった。一八六六年に彼は『一六一二年のポーランド人からのモスクワ解放と、ツァーリ・ミハイルの選出についての話』を著し、ロマノフ朝の成立に際して、一部の貴族が自らツァーリになろうと画策したが、「選出された人々ではなく、仕官者、全土の人々、カザーク」、すなわち「全土」がミハイルを要求し、動乱を終わらせるために彼らの意見が通った、と評価した。⁽²⁰⁾ ロマノフ即位の理由を、全国会議ではなく、カザークを含む「全土」の支持に置いたのである。

こうして、ミハイル選出において、ソロヴィヨフは全国会議を、パヴロフは西欧的な「国民」を、ペリヤーエフはロシアの共同体や非仕官者を、コストマロフはカザークを含む「全土」を重視した。

一方、イズヴォリスキーが採用した筋書きは一部伝統的である。「ロシア全土から選出された人々が集まり」、多くの者がポジャルスキーを指名したが、彼は即位を固

辞し、パーリツインとともにミハイル・ロマノフを皇帝に推薦した、というものである。この物語は、デルジャーヴィンが創作した前述の物語の系譜であり、本稿で取り上げた他の著作からは消えていたものである。しかしながら、その後の展開は少し異なる。ロブノエ・ミエストに多くの国民が集まり、諸公や貴族が到着して、ロブノエ・ミエストでツァーリの「選出」が行われ、国民はミハイルをツァーリに、というポジャルスキーの言葉を繰り返し、ミハイルに決定する。⁽²¹⁾ したがって、全国会議ではなく、民衆も含めた人々がミハイルを選ぶ。この時代における全国会議や国民あるいは民衆の重視は、記念碑で冠を捧げ持つミーニンの姿に合致する。

五. むすび

改めてまとめておく。全ロシア国家千年記念碑は、君主が神の庇護のもとに栄光に導いた国家の歴史を国民に知らせ、君主と国民の紐帯を強化するという意味での国民的記念碑であった。しかしながら、全帝國的、全階層的に国民の代表を下段に描くことを強調し、国民を表象

する記念碑の要素が現れた。これは、下段に幅広く群像をつくるというミケシンの案が採用され、彼に人物の選定作業が任され、彼が様々な人に相談し、社会の議論を促した結果である。しかし、そもその原因は、国民的記念碑と宣言されたことにある。大改革を進めるアレクサンドル二世には、国民に配慮する必要があった。

記念碑中段におけるロマノフ朝成立の表現にも、時代が反映されていた。この群像は、全体として、ポジャルスキーとミーニンが正統な君主の即位を支持したという伝統的なイメージを示した。一方、国民の代表としてミーニンが帝冠を捧げ持つ姿は、全国会議や国民あるいは民衆の影響力を高く評価する動きを反映したものである。その結果、昔ながらのポジャルスキー像と、幾分新しいミーニン像が同居することになった。とはいえ、全体的に像は伝統的イメージが強い。

記念碑は、国家の歴史を表現するにとどまらず、国民を表象したが、国家発展のイメージの比重が大きかった。時代の変化を反映し、階層や地域への配慮を意識しながらも、真に帝国的かつ全階層的に国民を表現するよ

うなものにはならなかった。アレクサンドル二世に確固たる国民観はなかった。社会に合意もなく、多様な人々が納得する国民的記念碑を制作することは不可能ではあったろう。

注

(1) 拙稿「救世主ハリストス大聖堂と二人の皇帝——アレクサンドル一世とニコライ一世」、『大東史学』第二号、二〇二〇年、五五～五六頁。ポジャルスキーは義勇軍の指揮官。ミーニンはニジニノヴゴロドの長老に選ばれ、義勇軍の資金を集めた。

(2) 本稿で用いる史料において「ロシースキー」(全ロシアの)と「ルースキー」(ロシアの)との相違は必ずしも厳密に区別されていないため、記念碑の名称以外では訳し分けない。

(3) 第二次世界大戦中に破壊されたが、一九四四年に再建された。

(4) Wortman, Richard, *Scenarios of Power: Myth and Ceremony in Russian Monarchy: From Alexander II to the Abdication of Nicholas II*, Princeton (NJ), 2000, pp. 80-85.

この記念碑の表象の関連ではほかに、Маѣпора Орыа.

- Бессмертный Рюрик. Празднование Тысячелетия России в 1862 г. // *Новое литературное обозрение*. 2000. No. 3. [https://magazines.gorky.media/nlo/2000/3/bessmertnyj-ryurik.html (2020.5.23)]
- (5) 新聞や雑誌の出版と読者の裾野が広がっているが、本稿は書籍を中心とし、新聞や雑誌を含めた分析は別の機会に行いたい。一九世紀後半の出版文化については、巽由樹子『ツァーリと大衆——近代ロシアの読書の社会史』、東京大学出版会、二〇一九年を参照。
- (6) Корнилов А. А. *Курс истории России XIX века*. М., 1993. Лекция XXIII. 竹中浩『近代ロシアへの転換——大改革時代の自由主義思想』、一九九九年、東京大学出版会、二五、三九頁。
- (7) Лебедев И. П. Возникновение кавказского земледельчества в Петербургском университете в период первой революционной ситуации // *Петербургский университет и революционное движение в России*. Л., 1979. С.94-96; Корнилов. Указ. соч. Лекция. XXV. С. 246.
- (8) Там же. Лекция. XXV. 竹中、前掲書、一九九二〇〇頁。一八六二年から翌年の代表制の要求については、同、第四章第三節。

- (9) Wortman, op. cit., p. 78.
- (10) *Памятник тысячелетию государства российского в Новгороде, печатано с разрешения господина главноуправляющего путями сообщения и публичных зданий*. СПб.: Типография второго отделения собственной его императорского величества канцелярии. 1862. С. 2-5.
- (11) Там же. С. 4-5, 7-8. Объявление о конкурсе на представление проекта для сооружения памятника имеющему совершиться в 1862 году Тысячелетию государства российского // *Русский мир*. СПб., 1 мая 1859 г.; Захаренко А. Г. История сооружения памятника «Тысячелетию России» в Новгороде // *Ученые записки историко-филологического факультета Новгородского государственного педагогического института*. Вып. 2. Новгород. 1957. С. 51-82; Майорова. Указ соч. С. 8.
- (12) *Памятник тысячелетию..* С. 5
- (13) Там же. С. 1-19.
- (14) Там же. С. 3-4.
- (15) ベイオロヴァが言っている「国民によつて建てられた記念碑」あるいは「国民に与えられる記念碑」とも解釈されう。
2. Майорова. Указ соч. С. 8.

- (16) Объявление о конкурсе...: *Памятник тысячелетию...*
С. 7.
- (17) 冊子は、「軼からの解放の始まり」
- (18) 冊子には、русского はない。一四九一年は北東ルーシを統一した年。
- (19) Объявление о конкурсе...: *Памятник тысячелетию...*
С. 7.
- (20) 同広場にあつた一八二二年の義勇軍の記念碑はソフィア広場に移動された。その後一九二三年にソヴィエト政府に破壊されたが、兵士の馬事訓練施設として一九世紀半ばに建築された建物の側に、二〇一二年に再建された。
- (21) 造形芸術博物館の前の広場。博物館の建物はノヴゴロド県のゼムストヴォ集会のために一九世紀半ばに建てられた。正面の新古典主義様式のボルチコは第二次世界大戦後のものである。
- (22) *Памятник тысячелетию...* С. 6.
- (23) 「ヤロスラフの館跡」と呼ばれるところの一角である。この広場は記念碑の公式冊子によれば、「ヴォルホフ川からの展望が開けているが、……わずかに斜面になっている」。一九世紀当時には交易所（一七世紀末建設、一八世紀末改築）が現存していた。一方、一七世紀末に建設された交易所の塔門が、当時この地区にあつた唯一の塔であつたとみられる。

- Памятник тысячелетию...* С. 6: Ярославно дворец // Санкт-Петербургский институт истории РАН. Великий Новгород. История и культура IX-XVII веков. Энциклопедический словарь. СПб., 2007. С. 549.
- (24) Карамзин Н. М. Марфа Посадница, или покорение Новгорода. Историческая повесть (1802) // *Избранные сочинения*. Т. 1. М.-Л., 1962. С. 692; Мордовцев М. Вечевой колокол // *Исторический вестник*. СПб., 1886. Т. 23. С. 9.
- (25) 鐘はモスクワのクレムリン教会広場の鐘楼に吊された。松木栄三『ロシア中世都市の政治世界——都市国家ノヴゴロドの群像』彩流社、二〇〇二年、三六〇―三六五頁。
- (26) 実際には一一世紀。
- (27) *Памятник тысячелетию...* С. 6.
- (28) Буслаев Ф. И. 彼はツァーリの鐘か、民会の鐘か、と書いた。Буслаев Ф. И. *Памятник тысячелетию России // Мои досуги*. Ч. 2. М., 1886. С. 208.
- (29) *Памятник тысячелетию...* С. 10.
- (30) Там же: Объявление о конкурсе...
- (31) Wortman, op. cit., pp. 82-83.
- (32) *Памятник тысячелетию...* С. 11.
- (33) 拙稿「ボジャルスキーとシーニンの記憶（一七―一八世紀）

- モスクワ解放とロマノフ選出のめぐり合わせ』、『日本一八世紀ロシア研究会年報』第一三号、二〇一七年、一二一―一二三頁他。Державин Г. Р. Из поэмы <<Пожарский>> // *Сочинения Державина с объяснительными примечаниями Я. Грота*. Т. 3. СПб., 1866. С. 469-473.
- (34) Буслаев. Указ. соч. С.191.
- (35) 冊子は一〇四人としてゐる。Памятник тысячелетию... С. 12.
- (36) Там же. С. 9-10, 13.
- (37) Майорова. Указ соч. С.9.
- (38) 藤沼貴、小野理子、安岡治子『新版ロシア文学案内』、岩波書店、二〇〇〇年、一二九―一九二頁を参照。
- (39) 松木、前掲書、三〇四―三〇九、三三四頁。
- (40) Памятник тысячелетию... С.13.
- (41) Там же.
- (42) Там же. С.14.
- (43) Объявление о конкурсе...; Захарова. Указ соч.; Майорова. Указ соч. С. 10.
- (44) Урладыиール・ディヤコフ（早坂眞理、加藤史朗訳）『スラヴ世界——革命前ロシアの社会思想史から』彩流社、一九九六年、一五五―一五六、一五九頁他。Маркенич Ал. Костомаров Николай Иванович // *Русский*

- биографический словарь*. Т.9. СПб., 1903. С. 305-319.
- (45) Захаренко. Указ. соч.
- (46)アレクサンドル一世期に内務大臣、ニコライ一世期に宰相を務めた。
- (47) Захаренко. Указ. соч.
- (48) ディヤコフ、前掲書、一五七―一六〇頁。
- (49) Императорская академия наук (изд.) Описание памятника тысячелетию России // *Приложение к Месцеслову на 1862 год*. СПб., 1861. С. 71-73; Некролог 1860-1861 годов. Там же. С 148-150; Захаренко. Указ. соч. 当局は科学アカデミーにシェフチェンコの名をリストから削除することを求めたが、同総裁ドミトリ・ブルドフは、すでに歴に予約が入っていることを理由にこれを拒否した。その際、ニコライ一世がリストに載っていないことを彼が指摘し、ニコライ一世がリストに加えられた。Там же.
- (50) ゴーゴリは、小説の反響にかかわらず、政治的には保守的であった。藤沼貴他、前掲書、一七〇頁。
- (15) Буслаев. Указ соч. С. 191, 201-205. 下段の群像はたしかに小さい。中段が主要部分であることを示す。ただし、記念碑の前では、下段のほうが近くなる。実際、母が子に、あれがレーンモントフだと教える姿を見ることが出来る。
- (16) Буслаевは、イヴァン四世、イコン画家のアントレイ・

ルブリヨフ、フョードル・ウシヤコフ、デルジャーヴィンなどを加えるべきであると指摘した。彼が参照したリストは、最終版ではない。因みに、イヴァン四世は一五七〇年にノヴゴロドで大虐殺を行った。彼がこの記念碑に採用されることはなかった。Буслаев. Указ соч. С. 189-190, 198-200. 前述したように、ツァーリの妃の衣装について、公式冊子では、民族的衣装と記されている。

(53) 竹中、前掲書、二〇五―二〇九頁を参照。

(54) 国家学派は大革命期の自由主義との関連が指摘されるが、チチュエリン、カヴェーリンと比較して、ソロヴィヨフは最もイデオロギー性が薄い。杉浦秀一『ロシア自由主義の政治思想』、未来社、一九九九年、三二―三三、七四―七五、一四四頁他。

(55) Соловьёв Сергей Михайлович. *История России с древнейших времен*. Книга вторая. Т.8. СПб., 1868. Г.8. С. 1023-1040. Беляев Иван Дмитриевич. *Положение русского общества в царствование Михаила Фёдоровича*. Казань, 1862. С. 3-6.

(9) Костомаров Николай Иванович. *Повесть об освобождении Москвы от поляков в 1612 году и избрание царя Михаила*. 3-е изд. СПб., 1884 (1866, 1876).

(15) Костомаров Н. И. *Личности Смутного времени // Вестник Европы*. 1871. №. 6. С. 503, 506-510, 514-515. 『ロシア人名辞典』は、コストマロフについて、北東ルーシ・南西ルーシにかかわらず、英雄の正体を暴こうとする傾向があったとする一方、ミーニンとポジヤルスキーに関する彼の評価は根拠のないものであると述べた。Маревич. Указ соч. С. 316.

(28) Забелин Иван Егорович. *Минин и Пожарский. Прямые и кривые в Смутное время*. М., 1883. С. 154, 156 и т. д. 初出は『ロシア・アルビーフ』(一八七二年)である。

(66) 元キエフ大学教授。一八五九年からペテルブルクで、ロシア初の日曜学校の考古学委員会メンバーを務めていた。

(3) Павлов П. В. *Тысячелетие России // Приложение к Месецеслову на 1862 год*. С. 31-32.

(16) Извольский Сергей Петрович. *Гражданин Минин и князь Пожарский. Освободители Москвы и отечества в 1612 году*. М., 1867. С. 69.

(32) Соловьёв. Указ соч. С. 1039-1040.

(33) Павлов. *Тысячелетие...* С. 3-70; Гроссман Леонид. *Россия Салтыкова (1925) // Собрание сочинений в пяти томах*. Т. 4: Мастера слова. М., 1928. С. 127.

- (4) Павлов. Указ. соч. С. 28.
- (5) Там же. С. 32.
- (6) Тарасенко О. О. Спотади М. І. Костомарова про П. В. Павлова // *Гілея*. Вип. 105. Київ, 2016. С. 135-148°.
- (7) Павлов Платон Васильевич // *Энциклопедический словарь Ф. А. Брокгауза и И. А. Ефрона*. Т. 44. СПб., 1897; Wortman, op. cit., p. 85; Павлов П. В. *Государство России. Краткий очерк отечественной истории*. СПб., 1863. С. 81.
- (8) Wortman, op. cit., p. 85.
- (9) Беляев. Указ соч. С. 4-5. Брйяр-Ефъ, Мхайлの時代には重要な問題はツァーリの勅令と全国会議の決議により決定された、「君主権力は……ロシア全土の権力と並び立っていた」と述べた。Там же. С. 6. 彼は後に一八六七年の講演では、「一六一三年の全国会議はМхайл・ロマノフに「完全な専制権力 самодержавие」を与えたが、Мхайлは全国会議の助言なしに重要なことを決定しなかった」と述べる。Беляев И. Д. *Земские соборы на Руси. Речь, читанная 12 января 1867 года на торжественном акте*. 2-е изд. М., 1902. С. 34.
- (10) Костомаров [1866]. С. 31.
- (11) Извольский. Указ соч. С. 63-65.